



創刊号
平成21年8月15日
発行
熊本市高平2-20-35
曹洞宗 浄国寺
編集者
中山義昭

ごあいさつ

以前より寺報の発行を言っておりましたが、今回どうにか第一号を発行することができました。改めまして、住職の中山義昭でございます。浅学非才の身ではございますが、浄国寺のために粉砕身頑張る所存です。何卒宜しくお願い申し上げます。

當山七世無蘭道全大和尚



当年三月二十六日、浄国寺の第七世住職である無蘭道全大和尚(中山道全)享年九十歳で遷化致しました。ここに生前のご厚誼に対し心よりお礼申し上げます。
先代住職(以下、先住

と称します。私の師匠であり、父親でもあります。元々寺の出身ではありません。天草郡苓北町に生を受け、父親(私の祖父)は町の役場の官吏でした。大変信仰深い人間だったらしく、一族より一人出家すれば七代救われる」と先住は、幼い時から言われていたそうです。旧制中学に進学する時に、この言葉を思い出し、又、自分が次男であること等を考え合わせ、一大発心して、長崎の野母崎町にある観音寺というお寺に小僧として入りました。苦学して駒澤大学仏教学部を出て大学の職員として暮らしていましたが、やはり自分の布教の足場となる寺が持ちたいと考えました。しかし既に曹洞宗でも世襲化が進み、住職地となる寺がみつかりません。本部から派遣の形で浄国寺に赴任しました。その当寺の浄国寺は、戦前から戦後にかけての混乱期に、

住職不在となり、その間に寺の財産や道具は売り払われ本堂は不逞の輩に占拠された状態でした。檀家もほとんど流散して、わずかの世帯が残っているだけ、本堂も何世帯にも貸し出され住めない状態、勿論収入などありません。仕方なく高等学校の教員をしながら生活をし、裁判で、自ら法廷に立ち不法占拠の住民を退去させるといふ日々を送りました。その間、昭和二十九年の白川大水害にもあいつ、過去帳や寺の資料も流されましたが、寺を守り続けた。その後も洪水の危険にもあいつ、白川河川改修の計画で寺の場所が河川敷になると決定し、新たな場所を探しました。幸い現在地を見つけたことができた。だが境内地に墓地を作るということができない、又条件として幼稚園の開設を要求されました。タイムミンクを見誤ると移転も上手く進まないといふことで昭和四十二年現在地に寺を移設して、幼稚園を設立しました。当時はまだ檀家数も少なく寺として

の運営は困難、又幼稚園の運営も難しいといふことで先住は熊本工大(現崇城大学)の講師をしていました。その後熊本市北部も住宅が増え始め、葬儀や法事、仏壇の開眼等を縁として浄国寺に参詣、寄檀される方が少しずつ増え始め今に至っています。又、宗門の役職も数多く務め、特に宗議会議員(国政で言う国会議員と同じ)に選出されてからは、寺院財産が潤沢にある大寺院ではない地方の貧しい寺院の代表として、又、寺の息子ではなく純粹な出家者の立場から宗政に対して強く意見を述べ、最後は宗議会議長という要職に就きました。「檀家の皆さんは、和尚さんとして、奉ってはいないが、どういう人間で何をしているかは冷静に見てござるよ」と弟子の私に口癖のように説いてきました。お坊さんが人間として偉い訳でも何でもない、僧侶は出家者という立場と仕事で尊いんで、それに見合うように修行に励めと言われてきました。

ゼ口からの出発に近い状態から、現在は春のお彼岸や夏の施餓鬼の法要の時に御参りに来られる方の数は熊本市の曹洞宗のお寺では一番多いのではないかと思われるくらい浄国寺になりました。この功績に対し、寺を再度興したとして、本寺である大慈寺様より、「中興」の称号を賜りました。本堂の左奥に檀信徒の総位牌や歴代住職のお位牌を祀った位牌堂のスペースがあります。そこに「當山七世 中興 無蘭道全大和尚」の位牌を今回祀るようになしました。これも皆様方の篤い信仰の気持ちのお陰と感謝しております。
御香資等について
先日の法要の際、先住の卒哭忌と初盆の回向も併せて厳修致しました。その際、皆様から賜りました御香資(香典)は、この位牌堂の改装並びに整備に充たせて戴きました。ここに報告致します。と同事に心より檀信徒の皆様方への感謝を申し上げます。
(位牌堂の整備は、先住が望んでおりました)

浄国寺の由来

元々は天台宗の寺院として建立されたようですが、詳細は不明です。場所も現在地ではなく本山の川向こうの今の河川敷の場所にありました。(昭和四十二年白川改修事業で現在地に移転)熊本市野田町(川尻)にある大慈寺の六世住職の東舟義勝和尚が当寺修行道場だった大慈寺の出張所として曹洞宗寺院に改宗しました。時を経て大慈寺八十七世の仰山賢高和尚の時に浄国寺は独立した一寺院となりました。しかし、その後徐々に寺院は荒れ始めたようです。明治になり、活人形師松本喜三郎翁が自分の生涯の傑作である谷汲観音像を東京浅草の伝法院から、先祖代々の墓地がある当浄国寺に移動させ、寄進されました。

「験記」と呼んでいました(が)。先代住職の着任当初の様子には前頁にも記しましたが、住職不在、迂闊に墓参に行けば、不法占拠している無頼の徒に絡まれるかも知れないという恐怖心もあり、檀信徒の方々も段々離れてしまっていたようです。寺の財産も備品も什物も無いお寺で、弁護士を頼む費用もなく、自らが法定に立ち訴訟を繰り返して、どうか状態を正常化しました。しかし、当時の私立学校の教諭の給与の中で、家族五人を抱え、寺の状態も整えるのは大変だったと思います。現在地に移転した時、私は小学校三年生でした。幼い頃は、決して裕福とは言えない生活でしたが、当時は、何も気づかずに暮らしていたように思えます。

現在地に移転後

今の場所に移って、幸いなことに幼稚園の園児数も増え、生活も安定し、てきました。私の小さい頃は、春彼岸や夏のお施餓鬼の法要の時は参詣者の数より お手伝いの

僧侶の数の数の方が多いくらいだった檀信徒の数も少しづつ増えてきました。特に熊本市内では浄国寺が曹洞宗の寺では北端に位置することもあり、市内北部の住宅地や現在の合志市からお寺に来られる方も沢山おられます。浄国寺の檀信徒(檀家や信者の方々)の特徴は、初めて寺と縁が出来た方が多いということ。元々の実家の所には菩提寺があり、そこは長男が守っている。自分は次男だし、現在住んでいる場所所に永住するから、新たにこの寺と縁を持ちたい。そういう方が大半です。そういふ方が大半です。しかも、初めて家から葬儀を出す事がきっかけという方ばかりです。又、当寺には代々の総代さん(世話人)は、おられます。せんし、総代会もありません。元からある浄国寺のしきたりの様なものもありません。だから、分らないことがあれば、何でもお寺に尋ねて下さい。そんな事も知らないと言われるのが恥ずかしいとも考えないで下さい。私も分からないことも沢山あります。だからこそ、

どうやったら、ご先祖様が喜んでくれるか、きちんとした供養が出来るか、を大切に、一緒に考えて、浄国寺の山風(寺のカラー)を作っていきたいと思えます。

これからの浄国寺

高校生の頃、宗教部(真和高校には、そういうクラブがありました)の部長をしていた時に、お寺は亡くなつた人の為だけにあっては、生きていく人が生きる智慧を得る場所であるべきだと主張していました。これは、今でも変わりません。色々な人が集い、お互いに生きる智慧を授けあう場所であつて欲しいと思えます。幸い当寺には、文化的にも大変貴重な活人形「谷汲観音像」があります。幼稚園という地域に密着した施設もありません。それに寺の本堂とは本来お話しを聞く為の設備です。先般鶴屋で行われた「永平寺展」には多くの人が集まりました。私は少しでも寺の敷居が低くなり、集まりやすい場所になりたいと願つ

ています。施餓鬼の法要の時に話したように、別紙の通り「お寺でジャズライブ」と称し、音楽会を開きます。これを機会にもっと気軽ににお寺に足を運んで戴けるようになることを願っています。世界のナベサダのバックを務めていた世界的な音楽家の演奏です。そんな音楽が本堂から流れていたらというささやかな夢の実現でもあります。是非お出で下さい。



最後に 今回は創刊号という事で、駆け足で浄国寺について記しました。次回から「曹洞宗とは?」「禅って何?」の内容や私の考え方について、少しずつ書いていきたいと思います。ようやく五十年代になったばかりの若輩者ですが、一所懸命に務めてまいります。どうぞ宜しくお願い申し上げます。